

## 月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-9

銀座5丁目にある自社ビル『H酒造』の東京支社を9月21日（月曜・敬老の日）午前10時に出発したトヨタプリウス1800ccは、4連休で混み合う上信越自動車道の横川サービスエリアにホワイトパールクリスタルシャインのボディーカラーの車体を、なんとか駐車させた。

本社と工場の他に2つの支社と8つの支店からなる『H酒造』の営業部門は、シフト制勤務となっていた。

素早く運転席から降りて後部座席のドアを開けようとする営業課長のJを押しとどめる仕草を見せた辰巳は下車すると、曇り空の東京と違い晴れ間をのぞかせる群馬の空に向かって背伸びをした。

多少の渋滞に遭ったが、今のところ予定より1時間遅れで済んでいた。

あと2日で秋分の日を迎えるというのに、気温は28度と高かった。

お店は連休だから、私の車で案内させてくださいと言う真紀の申し出を固辞した辰巳ではあったが、直に信州へ入る手前で用を足ししながら、脳裏に彼女と二人の道中を夢想している自分に苦笑を禁じ得なかった。

それにしても、と辰巳は反芻する。車中でのJ課長との対話は、昨日の真紀との手合わせの会話を棋譜になぞらえて脳内の盤上に並べて読み返していたので、おざなりで上の空になっていた。

勝敗の如何にかかわらず、真紀の駒さばきの良さに加え、直観力の精度の差がもたらした結果が、県境のサービスエリアにいる辰巳の現況に即している。

やっとの思いで荻野屋の峠の釜めしとお茶を買ってきたJ課長は、車で食べるのがベストだと済まなさそうに言って勧めた。

辰巳が同志社大学の学生だった時分に、軽井沢の別荘へ行くのには、特急『あさま』をよく利用していた。

軽井沢駅のひとつ手前の横川駅で人気の手売りの名物弁当『荻野屋の峠の釜めし』を買うことが楽しみの行事だった。

記憶を辿っていくと、釜めしの中身や容器の益子焼の土釜もほとんど変わりにくく伝統を引き継いでいるのが感じられて、それが辰巳には嬉しかった。

社長が完食したことにひどく喜びを表したJ課長は、足取りも軽やかに容器を返しに行った。

杏仁と米焼酎。イタリア産リキュール『アマレット』に酷似した一品が妙手となったようだが、最早勝敗などは辰巳にとって、どうでもよかった。